no.30

CLCからしだね書店便り

June 2023 6

＊今月のご案内＊

① 読書感想本『一九八四年』

② 座談会
「宗教二世」と
「クリスチャン家庭の子ども」
について考える〈Part.2〉

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間　11:00~17:00
定 休 日　日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第３木曜日は書店のみ営業

こどものための神のものがたり

語る人：大頭　眞一

第6回　アブラハムと神さまと星空と

さばくのよぞらは星がいっぱい
とても数えることなんか出来ません
その夜　アブラハムは
テントのなかでしょぼんとしていました
男の子がうまれなかったら　どうしよう
このたくさんの家族を
だれがまもってくれるだろうか、と
神さまは　アブラハムがいとおしくて
みをかがめるようにして　そばに行き
てをとるようにして　外につれだしました
すると
星、星、星、星
すみきったさばくの夜空に
数えきれない星が！
アブラハムのこころが
ふっとかるくなりました
かるくなったこころが
かんじました
神さまは世界に
すばらしいことをなさる
アブラハムをとおして
アブラハムとともに
その夜、世界にみっつの光が
かがやきました
アブラハムと神さまと星空と

大頭　眞一　おおずしんいち
1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ(BA、MA)と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

おとなのための　神の物語

子どもだったみなさんへ

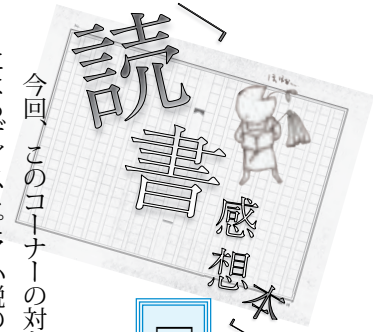
1
信仰とはなんでしょうか。教理を頭で理解すること？
感情がたかぶって神さまがいるような気がすること？ちがいます。信仰は神さまからのプレゼント。自分の存在全体が神さまにうなずくことです。

2
神さまはそんな人をとおして、そんな人とともに働かれます。ひとりでなんでもできるのに、私たちとともに働くのがお好きなのです。かえって手間がかかるのもご承知で。

3
神さまはアブラハムからユダヤ人を起こしました。神さまの体温を知る民として。神の宝の民として。そして、やがてそこから、主イエスがお生まれになりました。

4
今夜も世界にみっつの光が。イエス・キリストとぼくたちと星空と。

和紙ちぎり絵：森住　ゆき　もりずみ　ゆき
群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「アメイジング・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」(いのちのことば社)、「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」(日貿出版社)がある。埼玉県在住。



私たちを現実から遠ざけるもの

『一九八四年』

ジョージ・オーウェル（ハヤカワepi文庫）990円

今回、このコーナーの対象本として、ジョージ・オーウェルによるディストピア小説の古典、『一九八四年』を取り上げたいとの店長の希望で、約10年ぶりに読み返しました。

『一九八四年』と言えば、全体主義的政治体制のもと、個人の自由が徹底的に抑圧された社会をSF的に描いたものとして有名です。店長が本書を「読書感想本」として取り上げたかった理由は、「社会がどんどん『一九八四年』に近づいているような気がして」ということだそうです。それは確かにそうなのでしょうが、『一九八四年』が非常にリアルな小説であるということは昔から言われてきたことであり、また以前読んだ時にも当時の社会と重なる描写が随所に見られるのに感心したのを覚えていました。だから読み返す前は、「いまさら新しい発見があるだろうか」という気持ちがないではありませんでした。

ところが改めて読んでみて驚きました。確かにこの十年で、社会は一層『一九八四年』の世界に近づいてしまったようです。というのも、一つ一つの設定や細かい描写に、それがSF的な創作であるにもかかわらず、妙なリアリティを感じるのです。

例えば物語に頻繁に登場し、作品世界を構成するうえで重要な役割を担う「テレスクリーン」。個人の部屋の壁にまで強制的に設置されるこの「曇った鏡のような長方形の金属板」（8頁）は、国民を常に監視するとともに、強制的に情報を流して個人の思考を支配しようとする装置です。テレスクリーンによって「常に見られている」という感覚は、あらゆることがオンラインで済ませられるようになった現在、私たちが持つ名状しがたい不快感に通じるような気がします。また、ネットにあふれる真偽不明の大量の情報に私たちの判断が振り回される様も、テレスクリーンから絶えず流されるプロパガンダに人々の認知や記憶、思考が蝕まれて行く本書の描写に重なります。

あるいは、語彙とそれぞれの語の意味が極限まで切り詰められ、そのことによって話者の思考をも制限する「ニュースピーク」という人工言語。党によって考案され、推進されるこの言語においては、党にとって都合の良い正統的な思考を表す概念は「goodthink」の一語で表現される一方、異端的な意味を持つ様々な語は削除され、少数の曖昧で包括的な語にまとめられてしまいます（「自由」「平等」などの語はすべて「crimethink犯罪思考」の一語に包摂される、など）。ニュースピークが完全に浸透すれば、多様な現実を分析するための豊かな語彙が存在しなくなるため、人々はあらゆる事象を「goodthink」「crimethink」のどちらかとしてしか考えることができなくなり、批判的な意見を形成することが不可能になります（「ニュースピークを使う限り、異端の思想に関して、たとえそれはまさしく異端であると認識することは出来ても、そこから進んで、その思想の意味を追い求めることは不可能だった。その認識を超えて追及するために必要な語が存在しなかったからである（付録「ニュースピークの諸原理」10～11頁）」）。

言葉をどんどん貧しくしようとするこうした傾向は、なにも党によって強制されずとも、私たち自身の中にすでにあるものです。政治的な立場を暗示する用語やレッテルを使用することで、意見を異にする人たちを直ちに斥けてしまいたいという欲求が少しもないと言い切れる人がいるでしょうか。そうした一人ひとりの小さな怠け心が、やがて大きな敵意や破壊に至るかもしれないのです。オーウェルは、語の使用に対して怠惰であることの危険性を、「ニュースピーク」という架空の言語を通して示しています。

これら細部の設定や描写が持つすごいほどのリアリティは、小説で描かれる社会全体の雰囲気や、その社会に生きる人々の全般的な心性からも感じられます。むしろ小説全体の雰囲気にこそ、オーウェルの預言者的な才能がもっともよく表れているのかもしれません。

終始陰鬱な雰囲気のこの小説に出てくる人物は皆、どこか現実から遊離した印象を読者に与えます。「真実」とか「実感」といったものに対する冷淡さ、あるいはそのようなものを想像すらできないといった感じがするのです。かといって冷笑的なのでもありません。彼らは党を熱狂的に支持します。しかしそのような熱狂・狂信の後ろに、現実や他者から断絶しているという感覚、孤独が感じられます。彼らは、テレスクリーンから流れるプロパガンダによって、書き換えられ続ける歴史によって、ずさんに扱われた言葉によって、そしてなによりも自分自身の思考によって、現実や他者から切り離されているのです。それは党の圧政にひそかに疑問をもち、現実や真の他者との交わりを取り戻すべく行動を開始する主人公ウィンストンにもあてはまります（ウィンストンの恋人ジュリアは唯一の例外です）。

そして読者は、ウィンストンの抱くこのような疎外感が、実は自分たちも普段から多かれ少なかれ感じているあの感じであるということに気づくでしょう。例えば使い古された言葉を使って自説を守ろうと頑張るときに感じるそらぞらしさ。情報がありすぎて、自分の判断が最終的には自分自身から出ているという確信がもてない感じ。インターネットでたくさんの「答え」を得ても、それが自分のものになったと感じられないあの不全感。便利なはずの言葉や技術に振り回されて、そこにある現実

を感じられなくなっている私たちの姿がこの小説から見えてきます。

『一九八四年』が刊行されたのは1949年のことです。作者オーウェルは当時のソ連の全体主義社会を念頭に本書や『動物農場』を書いたわけですが、これらの作品はソ連崩壊後もその魅力を失うことなく、世界中で読まれ続けました。それどころかそのリアリティは時と共に増しているように見えます。本書で描かれる歴史・記憶の改竄や認知・判断の操作は、情報技術が発展した現在の方がむしろありそうなこととして読めます。今後も情報を扱う技術が発展していくならば、人間の記憶や認知がそれらから受ける影響もますます大きくなるでしょう。その時に私たちはもう一度現実とのつながりを取り戻すことができるのか、本書を読んで、そのことが問われているように感じました。

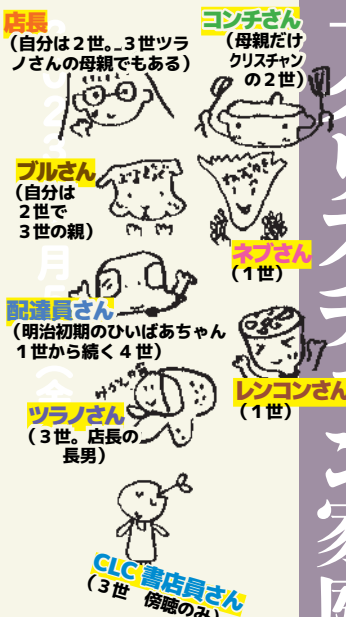
十年後二十年後にも、「今の社会がどんどん『一九八四年』に近づいてきている」と私たちは感じているのでしょうか。それともオーウェルの予見を超えてヒューマニズムが巻き返しているのでしょうか。それはわかりません。しかしいずれにしても本書は今後も社会を顧みるためのテキストとして読まれ続けることでしょう。

【書店員　凱】

オンライントーク会「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」(Part2)

2023年5月5日(金)

5月5日、からしだね書店ではトーク会を行いました。そのやりとりを何回かに分けてお届けします。一回目（Part・1）は参加者の自己紹介を中心に話が展開した様子を載せています。



このトーク会では、キリスト教家庭外からクリスチャンになった人を1世、クリスチャンの親に育てられた人を、2世、3世、4世…と呼んでいます。

★「神様に喜ばれる自分・こうしなきゃいけない自分・こう思わなきゃいけない自分」と、「本当の自分」とが乖離していき、それがすごくつらかった。

★「神様がそう言ってるから」という大人の言葉で、子どもは心の扉を閉める。

ブル：わたしは今、ある女性と2人で読書会をして学んでいます。彼女は、高校生の時、初めて行った教会でクリスチャンになりました。けれども、教会の中の上下関係や支配的な空気に傷つき、その教会に行くのをやめて、私たちの教会に来ました。その教会では、たくさんの奉仕を「喜びをもってする」ということを教えられ、最初はクリスチャンになったことがうれしくてやっていたけれど、だんだん自分の中に喜びがなくなっていくことに気づいたといいます。「クリスチャンなら喜んで奉仕するのはあたりまえ」「怒ることは罪」と教えられて、だんだん自分の中から感情がなくなっていき、彼女は、「私の気持ちって何？」「自分の気持ちを持つことはダメなこと？」と思うようになったそうです。「神様に喜ばれる自分・こうしなきゃいけない自分・こう思わなきゃいけない自分」と、「本当の自分」とが乖離していき、それがすごくつらかったと。でも今は、読書会の本を通して「イエスさまも怒ったし、泣いたし、豊かな感情があったんだ。自分も感情をもっていいんだ。怒ってもいいんだと思うようになったとのことです。以前は「いやだな」と思っても笑顔で「そうですね」と言っていたことを、ちゃんと「いやだ」と言えるようになってきたそうです。読書会が終わるころには、きっと神様が彼女に何かを語ってくださると思います。それを期待して、二人で読書会を続けています。

店長：よかったですね！

ブル：これは2世問題にも言えることで、答えをすぐに出さなくてもいいものなのに、一世が「これが答えだ」と言ってしまう。そして子どもは、それが自分の本心なのかどうかもわからないまま、言われたことに、「うん」と言ってしまう。「本当に神様はそう言っているのかな？」「聖書は本当にそう言っているのかな？」と考えることより、ずっと教会の中で積み上げられてきた「正しい」ことを、「選択」したり「答え」にしたりするのが、良いことのようになってしまっているように思います。

ツラノ：「こうすべき」とか「こうしなきゃいけない」とか「自分の感情を持ってはいけない」とか、心から実感していないことに、笑顔で「はい」と言ってしまう…。子どもが「個人として、ひとりの人格として尊重される」ことより、「家」とか「滅私奉公」的な考え方に支配される。そういうのを、本当に神様は望まれているんだろうかって、僕も常々疑問に思っています。キリスト教特有の思考の構造があるとすれば、「すべき」の背景に「神様がそう言ってるから」というのがあると思うんですね。例えば親に「こうしなあかん」と言われて、「なんでそうしな、あかんの？」と聞いたときに、「それは聖書にこう書いてあるから」とか「神様がそう言ってはるから」というふうに言われてしまうと、そこでピシャッと扉が閉まる。水戸黄門の印籠じゃないですけど、それを出された瞬間に、「聖書の御前である！頭が高ぁい！控えおろ～！」「ははあ～」となる。子どもは「これ以上、大人とは話が通じません」と思うんですよね。「やっぱり自分の考えてることって聞いてもらえへんねんな」「大人に、おまえはダメって思われてしまうんやな」と考えてしまう。大人の方が言語能力が高いので、子どもは言い負かされる。我慢するしかない。

店長：耳が痛すぎる！すみませんっ！

★親がソフトで「純粋に優しい」から、「かわいそうやし、大人に合わせてあげよう」って、子どもの方が大人になってしまう。

ツラノ：いや、クリスチャン家庭とか教会学校でありそうな、一般論ということで…（笑）あと、さっき店長が言ったことで、微妙に違うというか、訂正するとしたらですね、

店長：はい…？

ツラノ：親が子どもを服従させるための「巧妙

な操作」という話がありましたね。たしかに「巧妙な操作」をしている親もいると思うんですけど、僕の場合は、「親の純粋な善意だからこそ、言うことを聞いてあげないと親がかわいそう」と思っちゃうパターンでした。純粋で情熱に燃えているのは、もっと上の世代かもしれませんが、そのひとつ下の世代は、情熱もちょっと冷めて、「優しいなま温かい善意」みたいなものが多い気がしますね。「優しい・温かい・純粋」だからこそ、「それを裏切ったらかわいそうや」というのが、僕らや僕らのひとつ下の世代の子どもたちが感じてきたことのような気がします。それにプラスして、さっき言ってたパターナリズムみたいのなものが生温かく絡まっている感じだと思います。「強制的で強引なパターナリズムに押さえつけられて、それに反発してやるぜ!」って感じじゃないんですよ。悪意のある「巧妙な操作」でもない。もっとソフトで「純粋に優しい」から、「かわいそうやし、大人に合わせてあげよう」って、子どもの方が大人になってしまう。

★大人の言い分＝「親は子供に『いいもの』を与えたいと思ってる。『いいもの』が何かわかっているのに『どれでも選んでいいよ』と我が子に言いますか?

★子どもの言い分＝「聖書にこう書いてあるけど、本当?」とか「そもそも神様って本当にいるの?」とか「神様って、ほんまにいい人なんか?」とか、そういう疑問を親にぶつけたときに、大人がちゃんと面白がってくれたから、クリスチャンになった。

店長：同じくらいの年代の子どもを育てた、2世のブルさん、どうでしょう?そのへんの「純粋な優しさ」について(笑)

ブル：子どもが小さかったころ、「信仰の継承について」の講演会みたいなのがあって、その時の講師の言葉でよく覚えているのは―、あ、これ、良かったから覚えているわけじゃないですよ―。「親は子供に『いいもの』を与えたいと思ってる。『いいもの』が何かわかっているのに『どれでも選んでいいよ』と我が子に言いますか?」と言うんです。「これがいいものだ」と言って渡すべきなんじゃないか、と。「どの宗教を信じてもいいんだよ」と言うんじゃなくて、「イエス・キリストの神様を信じなさい」と子どもに教えるべきじゃないか、と。当時の私は「そうだよな」って思ったのは覚えています。でも「伝え方」が、それでいいのかどうかっていうのはありますよね。

店長：私もまさにブルさんと同じように思っていたと思います。「純粋な善意」のもと、自分が一番いいと思うものを子どもに伝えたいと思うし、間違った選択をしてほしくないという気持ちもあって。ツラノさん、それについては、どうですか?

ツラノ：この話に関しては「待ってました!」です。ちょっと親批判みたいになっているので、そろそろ親を持ち上げようかなと思うんですけど(笑)。僕が親にされてありがたかったことを言います。それはですね、自分が口にした疑問を面白がってくれたことです。例えば「聖書にこう書いてあるけど、本当?」とか「そもそも神様って本当にいるの?」とか「神様って、ほんまにいい人なんか?」とか、そういう疑問を親にぶつけたときに、―それはちょうど自分が思春期の時で、親もそのころ、教会の中でいろいろ考えることがあったんだと思いますが、ちょっと考え方が変化したような感じがしていました。―僕がそういう疑問を口にしたり、自分なりに考えて文章を書いたときに、すごく関心をもってくれたというか…。面白がってくれたんですね。それがなかったら、僕は今、クリスチャンじゃなかったと思います。「親に押しつけられるものを、自分はとても受け入れられない」って、「おえっ」って吐き出してたと思うんです。自分なりに咀嚼して消化吸収しようと思って口にした疑問に、すごく関心を持ってくれた。疑問に思う僕のことをちゃんと面白がってくれた。親だけじゃなく、友達とも話し合えたし、一緒に考えてくれる教会学校の先生もいた。「疑問をもつなんて、サタンの罠や」みたいに言ってくる人もいましたけど、そうじゃない人もいて、僕の疑問を同じ目線で受け止めて、「それは面白いなあ」と言ってくれる人がいた。

コンチ：ツラノさんが「面白がってもらえた」のは、発信することができる子ども自身の力が育てられていたということでもあると思います。面白がってくれる親もすてきだなと思いました。

ツラノ：ありがとうございます。

★アメリカで、宗教上の議論に初めてさらされて、「ほかでもない、キリスト教という栄養素をなぜ選んだのか」という議論に堪えることができなかった。そういう視点が私自身の中になかった。

★誰かと一緒に、歩みながら、考えるという姿勢

コンチ：私にとってすごく衝撃的だったことを話します。アメリカに留学して、初めて自分の信仰らしきことを話したときのことです。クラスメートに、「私はクリスチャンだと思う」みたいな(笑)ことを話したんですね。クラスメートの彼は「僕はクリスチャンじゃない。でも無神論者でもない。イスラムの神も、仏教も、ヒンズーも、キリストの神も、たとえて言うなら、人間が生きるために必要な栄養素みたいなものだ。それぞれ体にいいもので、自分にとってどんな栄養素が必要かは、それぞれが選択したらいい。僕はその時々に必要な栄養素をとっている」と言ったんです。そういう宗教上の議論に初めてさらされて、「ほかでもない、キリスト教という栄養素をなぜ選んだのか」という議論に堪えることができなかった。そういう視点が私自身の中になかったし、家庭の中でそういう話をしたこともなかったし、触れる機会もなかった。母親が「キリスト教はステキだ」と思ったかもしれないけどなぜステキなのか。他にいろいろ宗教や思想があるのに、あえて「キリスト教」なのはなぜか?他の宗教を持つことになぜ反対するのか、どうして嫌なのか、他の宗教とキリスト教と何が違うんだろうか?そういうことを議論したり、触れてこなかった。バングラデシュのラルシュ共同体に行ったとき、イスラムの神・ヒンズーの神・クリスチャンの神・少数民族の神を信じる人たちが、共に一緒に生きる、そういうコミュニティを体験しました。「あなたにとって、あなたの神はとても大切だよね」というような土壌がありました。そこで「あなたの大切にしている神はどんな神なんだろうか」って、もっと知りたいな、と思いました。そういう経験が私にとっては必要なものだったと思います。

配達員：ツラノさんとブルさんの共通点として、「一緒に考える」という姿勢があると思います。ブルさんは、一緒に読書会をして、彼女がいずれ個人的に神様から何かを受け取るときを待つということだと思うんですけど、親との関係ではそういう関係を作るのは難しいかもしれません。ましてや「熱い」親の下ではそうはならない(笑)。でも案外「熱い」親も、家族以外の人たちの中では誰かと「一緒に考える」ことができたかもしれない。首輪をつけてぐっと引っ張っていくのではなくて、誰かと一緒に歩みながら考えていく姿勢があれば、今、問題になっている二世問題のような極端なことにはならないのではないかと思います。

★「信仰継承」とは、どういうことを言うのでしょうか?

オンライントーク会 2023年5月5日(金)
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

★教会は、年長者も子どもも同じ神様の子どもとしてつながりあっている共同体だと思う
★「この教会は成長してるけどこの教会は伸びてない」みたいなことを言っちゃうこともー、それって「会社の売り上げが…」みたいな感覚に似てなくもないし。

店長：少子高齢化で、日本の人口も、宗教にかかわる人の人口もどんどん減少していく今、クリスチャンの家庭やキリスト教会の中で、「信仰継承」の取り組みが必要だと言われています。教会は、コロナ以降、すごく変わったと思うんです。今まで「日曜日は主の日です。教会に行きましょう」と言っていたのに、行けなくなってしまいました。ネット配信の参加ができるようになり、自分でチョイスするという感じになりましたよね。自分の教会の礼拝に出席しなくても、北海道でも沖縄でも、外国でも、「この牧師さんの話聞きたいわ」というところにアクセスできて、自分の所属教会でなくても、礼拝に参加することはできます。そういう風潮の中で、教会を維持するためにも、若い世代に向けての「継承」が必要だと。でも私はそれに少し違和感をもっていて。というのも、信仰って「継承」するものなのか？と思ってしまうんです。教会は大事だと思いますし、教会を守っていく責任も感じます。ただ、継承したい側の焦りと、「継承してね」と言われる側のしんどさ、みたいなものに、さきほどのツラノさんの「優しい善意を断り切れない」みたいなものがまぎれてこないかと。皆さんはどう思いますか？

れんこん：「教会の継承」みたいになってないかな、と感じています。私は信仰を持った後で就職して、所属教会から結構離れたところに行ったんですね。小ぢんまりとした良い教会に導かれました。職場があって、寮生活があって、その間に教会があって、寮の先輩にも教会にいっている人がいて、すごく恵まれていました。でもその時に、元の教会の人に「あなたが行っている教会は、信仰の特性が違う教会だから、こっちの教会に行くべき」と、強い口調で言われました。でも私はそれには従いませんでした。関西に帰ってきたこともあって、今に至ります。私たちが「教会の発展」というところに思考が向かってしまうのは、今の時代でもあるのだな思います。教会は、年長者も子どもも同じ神様の子どもとしてつながりあっている共同体だと思うので、年長者から若い世代に「伝えていく」っていうニュアンスは—そういう部分もないとは言いませんが、ちょっと違うように思います。私は、教会の中にもすごく多様性があると思いますし、イスラムの神様を信仰している人たちが日に何度も祈っているのを見ると、純粋に祈っている姿って美しいなと思ったりもします。空港の中でござを敷いて祈ってる姿を見て、ああきれいだなと思って、私も飛行機を待っている間に聖書を開いたこともあります。そこで「他宗教だから」と言って敵対してしまったら、そこで終わりだけど、神様の見てることってもっと広いのかなと思います。でも現実としては、勢力争いではないですけど「この教会は成長してるけどこの教会は伸びてない」みたいなことを言っちゃうことも—人間って弱いので—あるし、それって「会社の売り上げが…」みたいな感覚に似てなくもないし。

店長：私は高度成長期とともに成長した世代ですが、当時の教会が、「教勢」「教勢」とすごく言っていたのを覚えています。「礼拝に何人来たか」とか「受洗者が何人」とか。「成果が出ている教会は信仰もすばらしい。受洗者が少ない教会は牧師と教会員の信仰が足りない」と。空気としてそういうのがあったし、実際あからさまにそんなことを言う人もいたと聞いています。牧師さんの中にもランクみたいなものがあって、最上ランクは、教会を建てて、自分の子どもたちに信仰を「継承」して、その子供たちが牧師になったり宣教師になったりした人で、子どもがクリスチャンにならなかった牧師さんは、ものすごく肩身が狭い、みたいな。今の宗教二世問題に通じるところがあります。親も、どこかで自分の立場というものを保っていかなければいけないし、そんな空気の中で、子どもへのプレッシャーがあって、それで心を病んでいった人たちや、教会から離れていった人たちがいると思います。世の中の動きに連動して、そういう「成果主義」は影を潜めてきたようには思いますが、そのころの名残のような考え方は、今も根強くあると思います。

れんこん：教会は、世の中の動きから十年ぐらい遅れているような気がしますけど…。

店長：なるほど、そうかもしれませんね。

★宗教の本質的な排他性
★でも「譲れないもの」ってそんなに細かくたくさんあるんだろうか？と考えると、実は信仰の「核」の部分だけだと思います。
★「行動しか信じない」と言った中村哲さん。
★社会で排除されている人、弱い立場に立たされている人に対して、どんな行動をとるのか。僕は「行動」を見れば、その人の「本質」がわかるという気がします。

オンライントーク会 2023年5月5日(金)
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

配達員：宗教の性質上というか、その宗教を信じている限り、他の宗教とは相いれないというものを、本質のところに持っているように思います。世界で起こっている宗教対立も、「譲る」「譲らない」というところから起こっているのかなとも思うし。でも神様の愛とか、神様の視点って、そんな狭いものなのでしょうか？もっとおおらかなもののような気がします。自分にとって本当に大切で「譲れないもの」が確かにあります。でもその「譲れないもの」ってそんなに細かくたくさんあるんだろうか？と考えると、実は信仰の「核」の部分だけだと思います。それなのに、同じ宗教を信じている人に対しても、こと細かく「違い」を主張し合い、自分の考えに相手を従わせようとしてしまう。一方で、先ほど店長が言ったように、コロナによっていろんなものが変化していく中で、本来、信仰の「核」となるところをむしろ、手放しているような危機感があります。

ツラノ：今、配達員さんが言ったところが核心だと思うんですよね。何が譲れない部分で、何が譲ってもいい部分なのか。これから、ちゃんと対話して考えていかなければいけないものだと思います。「何を信じているか」という教義の内容的な部分に目をやれば、たとえば「プロテスタントとカトリックはここが違う」みたいに延々と続くような気がします。そのレベルで議論していたらプロテスタントの中でも相容れない部分ってたくさん出てくると思うんです。でも「イエスはどう行動したか」って考えたときに、はっきりするものがあります。「よきサマリヤ人」の話で、サマリヤ人とユダヤ人って、宗教的には違いがあったと思うんですが、サマリヤ人の行動は、瀕死の人の苦しみに寄り添ってとことん支えた。その行動の部分に、宗教の違うサマリヤ人の行う「神の愛」がはっきりと表れてしまう。だから中村哲さんの「行動しか信じない」という言葉に、僕は心底、共感します。口でどれだけ「愛」を叫んで良いことを言ったとしても、結局、その人がどんな「行動」をしているのか？そこにその人の愛の在り方とか、本質、人間観、人の尊厳をどう捉えているのかといったことが、いやでも表れてしまうんだと。教えとか教義の細かい内容みたいなものを超える、圧倒的な訴えかけるものがあるような気がするんです。例えば社会で排除されている人だったり、弱い立場に立たされている人に対して、どんな行動をとるのか。まだまとまってないんですけど、僕は「行動」を見れば、その人の「本質」がわかるという気がします。

次回へ、まだまだ続きます…

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

中島基行様、石原祐子様、西岡夏海様、萩野えり様（順不同）

4月の古書の収益は 68,400 円でした。【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】**献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。**

編集後記

◆昨秋、自宅の庭のデッキにいるアライグマと、サッシのガラス越しに遭遇しました。アライグマは、我が家の犬の食べ残したドッグフードをきれいにたいらげ、吊るしていた干し柿を盗ろうとしているところで私と目が合い、それでも逃げようとはしません。丸々太って、とってもかわいい目、おててモミモミする仕草は本当に愛らしい。◆でも、アライグマは人間にとっては害獣で、良からぬ菌をばらまきながらどんどん繁殖するとのことだったので、市役所に通報すると、捕獲用のケージが届いてしまいました。彼の運命を思い、ケージを仕掛けつつ「神様、どうかアライグマが捕まりませんように」と言動相矛盾する祈りの言葉が、口からついて出る始末です。◆そして先日の朝、とうとうケージの中で丸まっているアライグマを発見…。もともと日本にいるはずのない動物が日本で繁殖することになり、こんな運命をたどることになって、「ごめんね、ごめんね」と謝るしかない、つらい朝でした。◆引き取りに来た市役所御用達の業者さんは、有無を言わさず、新しいケージを置いて帰っていきました。ああ！【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ　075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりのバックナンバーはこちらから